築山庭造傳 上

築山庭造傳 全

F 60
6

北村援琴翁著述

# 庭造傳

参議郎金吾校尉藤井宿祢重好畫圖

B 7874

築山山水庭造傳

夫山水乃起れ討尋ぬるに。本朝にてハ文徳天皇南殿乃御庭乃山水ハ。太政大臣良房公の御作也。宇多院の山水ハ。昌泰三年に御出家まし〳〵てのち。亭子院へうつり給ふ。此院乃山水ハ寛平法皇乃御作なり。太政入道清盛福原に新内裏の山水ハ大蔵大輔若成作れり。後深草院乃御子。禅林寺殿御出家ありて。東山に山荘乃山水ハ作和するれ僧正了遍ぬん作なり。嵯峨天龍寺及び西芳寺等乃庭ハ夢窓國師作り給ふ。天竺までハ悉多太子ハ相成道乃間ならまさざし。

王宮に出させ給ハん事を。御父大王に望ミ給ふ。
大王ゆるし給ハざれども。兎角王宮を出給ふべき
気色みへ給へバ。御父大王是を歎き。いかにもして
とゞめまゐらせんために。すまれ給しますす宮殿の四方に
四季の景色絶ざらしめんとて。東にハ春の気色を
山。南にハ夏乃景色の山。西にハ秋の景色の山。北にハ
冬の景色を山を造らせ給ふ。これ山水の始なり。これ
とかくさびりなる閑所にてハ戸牖乃色城面の離れ四面
に四季乃山を作り。時おくに景色ことが葉を及バれ
ねばかりの風情ありとかや。されども代うはりさ海
かわりて。今ハ只秋乃山のこ述れり。其後相阿弥こいに
人。古き流れとなりしにて。古法れのごとく
東山慈照院銀閣なる庭。又ハ大徳寺なる大仙院なる庭など
ど。これかしこに作りとられしなりく。今こゝに往古達
人乃教と始に記し。次に所々勝景なる庭乃図を撰
し。此道とあそ給ハん人なる便とならしむるなし

干時享保二十龍次乙卯初春日執毫於向陽堂

洛下　北村援琴齋

築山庭造傳叙

# 築山庭造傳目録

山を作りやう法式
三忌五禍ある石の事
二祥三吉といふ事
面に植ざる草木の事
蓬莱乃嶋に橋をかけざる事
木石離別といふ事
名木枯木面前に植ざる事
平野ある事
山を遠近ある事
築山不相應ある事
築山泉水比喩乃事
景地を望こんて写しやうの事
庭坪地形乃事
石乃立やう木の植やうある事
立石陰陽乃事
瀧の事
瀧副乃石ある事
蓬莱山の事
二神石ある事

山汐よ橋乃かけ石の事
瀧口乃石の事
汐吐ある事
河すその石ある事
客人鳴乃石ある事
主人鳴乃石ある事
礼拝石乃事
山よある石ある名乃事
上座石ある事
橋挟の石乃事



汐際ある石の事
石乃名ある事　並ニあり石の事
溪間よ据る物の事
草木据石ある事
四畠ある事
九字の石立やうの事
竪横のおある石乃事
上座石乃秘事
呂律乃石立やうの事
其乃山汐み佛菩薩乃御名を配當する事

九品乃次第
佛菩薩御名乃事
佛菩薩乃御名配當之圖
五大配當之事
山水を愛する心得乃事
山水は主心に性をとる事
相生相剋之事
石を疊といふ事
山水氣象體志乃事
發前は景を我庭前へうつる法
茶人の庭作りやう之事
水なき庭之事
石燈籠をさやう乃事
大なる立石を置しやうの事
うこきの泉水に奥ある龍つる事
金魚を養ふ法
溜り水は泉水の事
杉苔植やうの事
松乃植やうは秘傳
松既に枯んと欲するを生す法

石燈籠并ニ手洗鉢等よく古べやうの傳
泉水の魚を鼬にとらさゞる法
竹を斑にする法
竹を植るによき月日の事
接木さし芽の事
催花法
菓乃実落ざる法
松の植やう乃事
諸木を細くする法
諸木に毛虫つかざる法
池に蛙を放つ事
庭坪地形之図
石燈籠乃図
手洗鉢之図

築山庭造傳目錄 畢

## 山水作りやう法式

凡山水の作りやうハ。第一地形乃ありさまと肝要と決定より
山水のもやうを割出し。石を建草木を植て景色を顕す
ものなり。たとへバ漢土の廬山を摸し。西湖の面影を作る
など。其ありさま委く詳に記しがたきやうなれども。僅
に尺寸乃紙に寫しうる景を見ても。即時に地形木石
のありやうを胸中に念記して。庭坪の廣狭に随ひて。
築山遣水とうしろへおもてとさし道乃巧拙とも。庭を作
らんと欲する人ハ平生風景勝れたる地に到て。其大

概を紙に書写し。我覚へとして自身の胸内にとやう
を考へ斗るべし。此工夫を熟練せバ自然に功者と成
べし。但其所の景色よく摸さんと怠く地元をせバ。景
数多ある所までハ五日六日にも考へざるべからず。故に景地
をえらむところに習ひあり。左に記す庭坪地形乃古法あり左に記す
以上築山第一の伝とす。第二に建石乃吉凶。草木を植る
木乃善悪を能し左に記す建石の居やう塁やう是を
極秘事とす左に記す。たとへ禁庭ありとも。前栽乃高山
を畳。数千丈の瀑布を漲て落し。遠水巨海の致景
とあらはす事此に隠し只水石の畳やうにあり。以上築山第二
の伝とも。第三に真草行の格に因て気象体志を示すべ
し。是庭坪地形取の時より巧出せるとにハあらず。大概
木石を植並べ気象体志とんに含。造り出せるとよし。
たとへ平庭にして石を居並にも気体格式位へ
造化自然乃妙を現すとして山あれ格ごとしも。いかほど
摸様面白からの景ありとも気象格く体格その八
ざれハ。築山乃正理を失ひ。其主人の意まであさましく
おかしく成る。故に古の風雅達人の造られし築山の書に数多く体格を考へ記して猿楽の役者とれ按に天下名物
に熟縁とく見けり。文字に熟字縁字あり。語に熟語
縁語あるがごとし。是自然と定りある理にてこれに背

と離別といふ。人々辨へあることなれども。今動に物を造りなを
時。んとつけざれバ辛尓うして縁離る過失あり。故に庭を
造るにもとやう而已に氣とつけて。縁不縁乃差別もなく。
辛忽に一木一石までも並べへなきすまあらバ。此一事を
数多く紙筆に記し盡しがたし。此他の尤に一二の大綱
とあしく准へある假とせり。以上築山第二乃傳とす。此
外は口授秘傳ありといへとも。此二ッの用を遁るべからず。
見着忽にすることなかれ

二忌 五禍 并 石の事

山乃ハ立石に二忌 大禍とのいて嫌ふ事あり。二忌とハ。
一ツにハ家乃棟とさる石といむべし。長き石代端より奥
へ伏て。其家の棟に遠ふをいふなり。但山渓北奥などハ
若しかし佬。一にハ主人嶋の前に凸かくのごとくかどあり
てすわらざる石をいふ。三ツにハ客人嶋乃外の面の受うろ
石を忌なり。大禍とハ一ツにハ頭大きにして地ぎハ細き石
を嫌ふ。二ツにハ二神石と立ざると嫌ふ。三ツにハ礼拝石
と立ざる代嫌ふ。又に金守護石なき代嫌ふとあるべし

二祥 三吉 と云ふ事

二祥といふハ。一ツにハ東南面の庭を祥といふ。二ツにハ
瀧乃後に高山大木ある代福とす。三吉とハ一ツにハ

主人嶋に安居石を立るゆゑに二川にハ西岸乃松をよく
やうある木ぶりを植るをもつて二川にハ庭前に砂利を
まくをいふこれを二吉と表す

西に植ざる草木の事

万年青　紫竹　西に植ざるなり。おもとハ名を
ろし。紫竹ハ娥皇女英乃涙より染出しゝ竹なりと
いや。又芭蕉を主人嶋に植ざるハ風にあひて破れやす
きがゆへなり

蓬莱乃嶋に橋かけざる事

中央乃嶋。蓬莱の形ちハ嶋の魚亀りし洲。海中にある
嶋にて仙人のすめる所なるがゆへなり。吹上嶋ながき洲
浜辺乃ころなる處にハ耳石をたてず。又苔のふせ洲砂利
を淘くる吹上るていにまくなり

本末離別といふ事

本末離別といふハ深山に生べき物を野辺に植。野辺に
生ずる物を野山にうゑべし洲

冬木枯木西岸に植ざる事

冬木とハ何にても葉の落る木をいふなり。但梅など
ハくるしからず

以上各不相應とも離別ともいふなり。是皆忌嫌を

よく考へて除くべし

平野乃事

平野ハ尾上なき所なり。石を立居から此

山水遠近なる事

遠山ハ低く近山ハ高し。遠きハ高く近きハ低し。此ところを
以て築山遣水乃巧をなすべし

築山不相應なる事

築山立石に真行草の古法あり。往古相阿弥の作られ
し圖式を見て合点すべし。今板行して世に流布ある
由へ書に備ふなり。然れどもあながちに圖のごとく
庭を作らんとせバ其のまゝなる岩石なく。却て庭乃模様か
くしして偏屈なるべし。古法を見て作意乃りとしてとすべ
し。小庭にあり。大石を立あるべ。大庭に小さき石を居る事
第一乃不相應なるべし。又小庭に大きの山水もせハしきやう
にてみぐるしかるべし。作功者の上にてハ狭庭にも其乃山水を
風流に作りなるハしほらしくてせハしからず。當世ハ大概
行草を專らとして難あらん歟。峯の高さも右の意に同

築山泉水比喩なる事

凡山水乃表示あり。文武農商の家それ庭ハ吉事を表
し。守護蓬莱二神島の名目あり。佛者寺院等の庭

八釋門の名目を表するし分論なり。故に此書は人乃定め
得ぬ名目を挙ぐ。僧俗一家の比喩をトに記とものなり。覧
人其好むところに随ふべし。

景地を望み見て寫しやうの事

先山あると唱る第一の傳なり景勝れたる所に到て其形を庭に寫さんと
欲せば。其所の正面より其中の景をとへて。峯の上の形。中ほどの形を
見とをし。其間に在ると目に来る木石の形を見て。是を画圖紙に書
寫し。山下に谷或ハ流あらバ其下の形やうを寫し。夫よりたの方の山峯
谷或ハ瀧あらバ其形を上中下とみなして。又畫圖紙乃左の
方に寫し。扨右の方の山峯より下へ同しく上中下と見

まうしいづれも其間の木石乃形を畫圖紙の右の方に寫し
夫より山より下れた右中の景をとくと見わたして谷
際に寫し。扨左へよりて向乃景を見まうして左より見る
所乃景を紙に寫し。又右乃方へよりて向ふの景を見まうし
て。右より見る所乃景を紙に寫し取べし。かくのごとく望こ
見て目に其所乃高低曲直。其あるくの木石の形をとくと見覚
へて寫し取べし。池の形は湖乃景を寫すにも右のごとくにお
の正面より向ふ并二段に見渡し。又左より見まうし。右より
見渡して其ある摸様を紙に書てんをへとすべし。畢竟
山峯瀧谷等上中下の摸様を寫し。湖海川沢池等も目

に及ぶ向への端々中など迄。とかくの岸とも。いづれも三段に見て景を
取べきなり。景地に到て悉く其模様を写さんとせば。数多の
景に見迷ひ幾度にも斗ありがたく。んと労する費あり。右の
ごとく考ぬれば景の見所の眼を写し。築山に写して恰其景
地に到て見るべき地すべし。然れども此傍は度て景地を臨み見ざれば
工夫出がたきものなり。此傍のごとくにして記うしてよ山ある地数景を
見習ふべし。是山水を模す秘授なり妄に譲ることなかれ

庭坪地形の事　庭坪地形の図おくに出次

庭坪の地形の事是肝要なり聊しひなり図を見て会得すべし

石の立様本の植様の事

太概古法の図を考て石は立木の植所を旨とし。畢竟岩石
を集て恰ぬとえつくろひ。立石伏石嶺滝嶋なるに居べき工夫
形ぬべし。始より庭のをやうと定むべき事にあらず次。岩石
を見て自然と面白き景をあらはす事此道の妙にして。数が
別伝こも云ふべし。よく造化自然の体を貴ぬ。強く巧をする
と嫌ふ。石の居不居といふ事自然の景といふことを忘れば妙なる
石居がるき着なり。惣じて山なれば模様は柔和にして幽深
玄遠なるんことを欲し。神造自然の境に誘と功達の依怙とす。
木の植やうも亦かくのごとし。面前の近き木は枝ありて風流なる
を用ひ山峯嶋瀑布なる石れお意を見合景を模して植べし。

植込の樹木ハ繁くして。其中に滝をなすべし。古人棲霞亭苔
日陰烟纏ニ中腰ニ暗水列石骨。欲風松光鳴疎雨苔已滑しこれ神仙亂
と云ゐる山水風景眼前にあるかごとし此意味を悟べし

## 立石陰陽乃事

たるく立る石ハ陽の石としるべし。故に滝口にも両代
つりさする故に陰なれハ水滝口にたるく立る陽の石を
立べし。陰陽和合乃道理なり。横にある石ハ陰乃石と
しるべし。陰陽和合して立る肝要なり
惣じて石に限らず本末にても竪を陽とし横を陰と
としるべし。不立石。不臥石。中檜乃石をも陰陽和合



の石としるべし。又川除石といふ石もあれ名ある石
を数に入らず

## 瀧之事

龍門或ハ廬山乃瀑布などと形容をあらはすあり。寺院
なる乃瀧口ハ無熱池の瀧口をかたどるなり。此無熱池ハ
大雪山の頂に無熱池あり。此水流れて四大海へ落る。東
ハ銀牛口より流れ出て。殑伽河となりて東海に入る。
南ハ金象口より流れて信度河となりて南海に入る。西
ハ獅子口より流れ出して縛芻河となりて西海に入る。
北ハ瑠璃馬口より流れ落て。徙多河となつて北海に

入る。此界ハ南洲なるが故に金泉山を表す。依て山水の滝口ハ大旨東南乃方にあるべし。然りといへども大概座敷乃上に攝する故に。西北にもあるべし。先ハ座敷乃上の方に瀧口ありとするべし。滝口南にあらバ北方に必香泉山あるべし。山なくば樹を植べし

## 滝副乃石立る事

瀧口に必滝副の石とて大石を立るなり。佛者ハ不動石といふ。其左右に童子石を立べし。或ハ八川或ハ四川。或ハ二川あり。是則八大童子四童子二童子なり。不動石乃下に石座を立る。不動明王ハ大盤石に坐し給ふなり

此石ハ有無不定なり

## 蓬萊山乃事

山水の中央に蓬萊山あるべし。是祝言なり。蓬萊山ハ亀の形なり。故に亀乃石　亀頭石　亀脚石　尾崎石を立べし。此立様いづれにても大事なり。此嶋を中嶋といふ。必松数植るなり。そして木なき時ハ亀乃形の石数立るなり

## 二神石之事

山水の前両脇に必二神石数立べし。又二王石ともいふ。又二柱石ともいへり。石の形によりて二川三川副るあり。

作者のくふうにしたがふ。二ツも石に陰陽あり

## 山水に橋のかけ石の事

山水に橋のかけ石は。平河すそと中径とにあり。滝口に椋木をひて橋とかける事あり。是は猿などのつたひわたるべし

## 滝口の石の事

滝口の石に水受石　溪副石　波分石　水分石　などいふ石あり。是山水の大事なり。能居を考へくたつべし

## 水吐の事

河すそを水吐といふ。又滝口南にあらバ水吐北の方にあるべし。其熱池のかしらを徒河といふ。故に徒を流しといふ

## 河すその石の事

水除石　落水石　浪受石　塵流石　木葉返石
水門石　等あり

## 客人嶋の石の事

山水の中の嶋に二嶋あり。端にある嶋をば客人嶋といふなり。此嶋に客来石　対面石　履脱石
鴎宿石　水鳥岩　など　あり

## 主人嶋の石の事

山水の無ハ端に二嶋あり。さしよりにある嶋を客人嶋といふ。
奥にある嶋を主人嶋といふ。此嶋に　安居石　腰息石
遊居石などあり。此外別石ハいくつありても数に入る次

礼拝石乃事

三神石の前に礼拝石あるべきなり。石はいくつ一ツ二ツ三ツ
あり。三神石ハ和に山あるべき所なり。山なくバ木あるべし

山にある石名乃事

左の方奥ハ高山に　山頂石　嶺脚石　山腰石　慶雲石
穿陰石　暁月石　月陰石（月窟石ともまた　天窓石ともまた）などあり
又山路に　道居石　行路石　かやうれ石礼あり。月陰石
ハ西乃山にあり。吐景石ハ東の方山頂にあり。山水
此石乃多少ハ表草行に依て不定なり

上坐石の事

上坐石ハ山此間にあり。主人嶋にも客人嶋にもなる。
いづれも木乃うしろにあり（上坐石乃事。別して秘事なり故に秘伝奥にしるす）

橋挟の石の事

石橋にハ橋挟の石四ツあるべし。但所に依て二ツも
一ツもあるべきなり。大概山水にある立石の名かくのごとし

水際の石の事

水際に遊魚陰といへる石あり。下れときこゝろと志べし

石乃名ある事　並ニあり所の事

鴛鴦石　水きハにあり　水禦石　河すそにあり　垂釣石　岸にあり

虎渓石　山の渓にあり　蓊陰石　山の上にあり　遊山石

盃石　蒂石　硯滴石　いづれも嶋にあり　硯用石

筆石　筆架石　怒濤石　墨いしなり　これらハいづれも多きハにある

渓間に植る物乃事

蕗　芝蘭　紫苑　菊　玉簪花　芍薬　萱草

笹鳴なと渓間に植べし

草木植不成事

梔子　柏　楓　葛　山にあり　女郎花　野にあり



万年青　梅　菅　嶋山にあり

沈丁花　丁子梅　藤　百合草　山松なり

蓮　菖蒲　澤にあり

芙蓉　銀杏　伊吹　一八　黄梅　躑躅

山路又嶋にあり。右草　名木甚数多かるべし

田畠の事

大なる山の上山陰谷間などに田畠などのところも
あるべきなり。又河すそに作る事もあり

九字の石立やう之事

山乃外作様ハ公家武家寺社等皆同事なり。数と

いへども、山水よ内習ひあり。石と四竪又横と立るなり。是れ九字乃ふみにてかくれどとく石を立れバ怨敵悪鬼寄ると拂ふの義あり。長く欠る石。三角なる石。偏りある石。穴板なんどく横に立るハ四竪又横乃石にあらず。かやうれ石ハいつれもさん、石乃形なり。四竪又横乃石を立石四川年なる石又川立る形なり。不立不外去石を竪横乃石にあらず。分別あるべき者なり

竪横乃形の石れ事

かやうの形乃石ハいか程ありても。竪横乃石乃数に入らず。副石にすべし。四竪又横乃



石れ立やう。石れ図のごとし。但同形乃石を四所に立れバ見にくきあり。立ることもさすが目に立ざるやうにこゝろえて立べきなり。其作者の意にあるべし

上坐石乃秘事

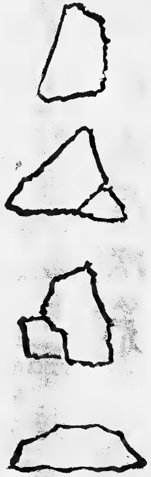
寺院等の山水に一川水習秘事あり。山乃麓に本と棟く。木のかげに平石をすゆる形なり。此石を上坐石と號せり。其石ハ因縁あり。天竺摩訶陀國伽耶山乃麓に歓喜樹といふ木あり。其下に上座石といへる石あり。三世ハ諸佛出世の時。此山石の上にて正覚なり給ふ故に。正覺石ともいふなり。又三界獨尊石ともいふ

なり。此石とかざり庭中に立ときく座するときも。觀念を轉じて正覺乃縁とするなり。故じて佛像に入事ハ表示となとす。或ハ客人嶋主人嶋にも此石乃ことあるべきなり。是ハ上座石の大事といふ。別に示と播へてとく爲きなり。葉室乃西芳寺にも夢窓國師作乃上座石あり

## 呂律乃石立換の事

律ハよくすゝむる石といふ。とし、かけうる所にハ副石を立弱き方にも石を立そへて。威儀具足すると律といふ。呂とハ一ッづゝ二所三所に其间をへだてて或ハ天枝のけく切をはさむと呂なり。人の根本に仁義禮智信とありて其ごとく行ふと律義者といふ。二常かけてかゝ落なる氏を呂おん人といふごとくなり

律乃石



呂の石

かくれごとく其飛すゝりあるハ律なり。すゝまざるハ呂なり。律ハ吉事にて生の方。呂ハ凶にて死の方。律を陽呂ハ陰なり。故に呂ハ石と下向立まじ。死にあらば呂律の二徳をしるべく。萬物出生する故に。呂の石ハ所に

より山陰にあるべきなり

其の山々に仏菩薩の御名を配当する事

凡山々ハ西方浄土九品の曼荼羅と表せり。故に悉く仏菩薩明王等の御名なり。又山嶋平砂皆是九品の次第なり。故に山々ある所へハ仏菩薩も御影向ありといへり。毎日塵埃拂ふべしとぞ

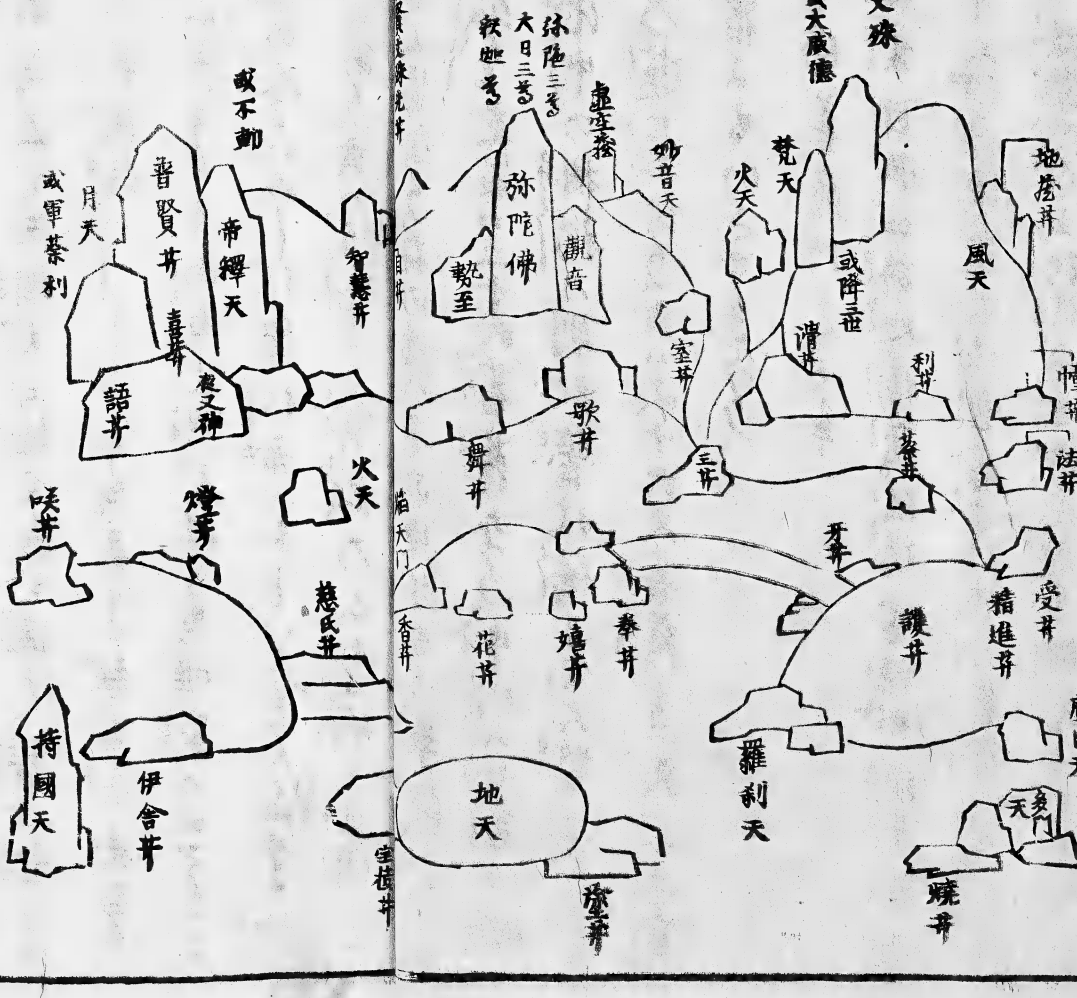
九品の次第

三尊石のある所ハ上品上生なり。左の山ハ上品中生也。右の山ハ上品下生也。中嶋ハ中品上生なり。山腋嶋ハ中品中生なり。瀧腰ハ中品下生なり。尾崎左の嶋ハ下品上生なり。右の嶋ハ下品中生なり。平濱ハ下品下生なり。三石ハ二十五菩薩なり。中川ハ七宝の池なり。池中の掛橋ハ則弘誓の橋にて大勢至菩薩影向の蓮臺なり。或ハ又十六大菩薩十二天。十二宮二十八宿にもかたどるなり

仏菩薩御名之事

阿難。加葉。目連。加旃延。憍梵。波提。富樓那。須菩提。羅睺羅。其外大阿羅漢等不休息菩薩。満月菩薩。宝月菩薩四大天王。跋難陀竜王。阿修羅王。難陀龍王。釈提桓因。日天。月天。皆是釈迦会座也

佛菩薩乃神名配當之図




右の図ハ当山乃修者秘伝大事これハすぐ色もらさゞるものなり
又大配当ある事
山ハ地水火風空乃又大配当乃事。是亦別して秘伝
なり。地ハ山嶋なり。水ハ海なり。火ハ草木の花なり。風ハ
咲すも散るも風乃まゞなり。空ハ諸草諸木枝葉あく

きハ空の色なり 青白赤黒黄 空風火水地 五色なり。ゑ又五行なり。五倫なり。識ハ有まして法界乃體なり。是又仁義礼智信乃五常ともいふべきなり

## 山水を愛する人の事

夢窓國師の云。古へより今に至るまで。山水といひて山を築き。石を立樹木を植て水を流し。嗜て愛する人多し。其風情ハ同しといへども。其意趣ハ各別なり。或ハ我心にハさしも面白しと思はねども。唯家のかざりにして。世の人にいみしげある住居かなといはせん為に植る人もあり。或ハ万事に貪着乃心ある故に。世間の珍寶を集めて愛する中に。山水をも愛して。珍石奇樹をえらひ求めて集めをさむる人あり。かやうの人を山水にやさしき事とハ愛せども。只俗塵を愛する人なり。白樂天ハ小池を堀て。其邊に竹を植て愛せられき。其語に曰。竹ハ是心虚なれバ我友とす。水ハよく性浄なれバ吾師とすといへり。世間に山水を好む人。同くハ白樂天の心のごとくならば実にこれ俗塵を離れ。天性淡泊にして唯詩歌を吟じ。泉石に嘯てんと思ふ人あり。烟霞の痼疾。泉石の膏肓といへるハ。かやうの人の語なり。是とハ世間

まやうしき人とおもはるべし。それをひがやうなりとも。
そしらんなくハ是亦輪廻の基なり。或ハ此山水に
對して眠をさまし。徒然を慰め茶道を行ふ者一助と
することぞ。彼ことに貴しともいふべし。然れども山水もし道を
行ふとともかく差別せバ。眞實の凡人とハいふべからず。或ハ
山。大地。草木。瓦。石。皆息。是自己の本分なりと信ずる人。
一色山水と愛する事ハ世の情に似されども。然て其世情
を厭ひとして。泉水草木ハ四季にかゝる氣色を工夫
とする人あり。そしよくかやうなるハ。道心の山水を愛
することやうと志るべしとぞ。故に茶家ハ此山水をとんと。



六大法身當相即本而眞の旨を覺知し修すべし。
天台宗ハ一色一香無非中道のさとりを得。此宗なる人
ハ四季の轉變を觀じて。無常のこゝろを起すべきなり

山水の在所に姓と云事

南に山水あるハ火姓の庭也　北に山水あるハ水姓の庭也
東に山水あるハ木姓の庭也　西に山水あるハ金姓の庭也
南に山水あるハ北向の庭也　北に山水あるハ南向の庭也
東に山水あるハ西向の庭也　西に山水あるハ東向の庭也

相生相剋之事

木姓の人ハ水相生　西相剋

火姓の人ハ東相生　西ハ尅
土姓の人ハ西相生　北ハ尅
金姓の人ハ西相生　東ハ尅
水姓の人ハ東相生　南ハ尅

然りといへども古へよりある庭ハくるしからず。始て山水を造る時ハ其地を祭りて住べし。深秘口傳す秘そこ右の山水ハ諸佛影向ある蓮臺なる故に。いかなる所にても方角かまハず造りて苦しからず。却て其家の守護としてあるべし。此のごとくありといへども。山水にも法式とも志らず。して推量にて石を立。樹を植ば。守護とハなるべからず。分別あるべき事なり

石を畳といふ事

世に秘傳の金谷の石を畳む事妙ありと。凡石を畳むといふ事ハ間尺僅に定つまる庭に。深山幽谷の趣きをあらハを縮にして。名人の作意にあり。未錬なる人ハ及ぶべきさまにあらず。其大旨を讃せバ。石の竪横を見計ひ面前より奥へ居あらへく其あしらひの樹木高低を別て植。或ハ石の根を隠し。或ハ石の中央をあらハにせず。模様を示さに植て見とあしらひ。副石のつなひやうに心をこめて。面前より奥の方へ。山峯幾重も畳たる

ごとく景をあらハす。是を石を畳といふなり。たとへバ十二三
重十九畳などと世にいふ傳へなる事。あながち石を十三段に
畳十九段に畳重ぬることにハあらず。石のつかひやう。あ
しらひにて。幾重にも模様をあらハし。さながら十三畳
にも十九畳にもみゆるといふことなり。又小庭平庭に
石を重ぬといふことあり。別に秘授なれバ爰に漏し侍る。
瀧を造るに上より下まで一筋にあらハるれバ瀧優がごと
くなして風景すくなし。瀧の上を樹にて隠し。あるハ中
ほどを滝の中央を岩或ハ樹の枝のさし出る形をなし。又
なし。或ハ落の腰に草などあしらひ。瀧を匿にあら
ハに見せざれバ自然数丈の飛布とみゆるなどしき思ひあり。
池も又しかり。池の形四方あらハに見ゆれバ。何ほど廣き池
なりとも其廣さを見尽して風情すくなし。小き池
なりとも形を面白く曲となし。此彼に草木石のあし
らひにてあらハに見せざれバ。自然湖海眺望の気象も
籠るべし。是皆池を造る極意深く味へ度き
事なりとぞ

山水気象體志の事

山水に気象體志を備ふること粹知べき要なり。気象
といふハ築山遣水を造るに其主人の心を顕し思ひ

然乃氣味を象出してなも佗雅さそのあり。詩家は氣象を寫しなすといへるに同し。輪苑氣。山林氣。俗世氣。神仙氣。儒先氣などく差別を立ててそれ々の趣にあるべきそのなり。體志といふも詩家乃説に同し。作り出せる山水に自然し體格備りり。高逸貞静德識等乃志をあらはもしての妙理あり。景を面白く寫さんとふくこれ摸擬を巧みにれバ氣象なく先ひ體格定らず。都く鄙俗の體をあらはも本意し。慎むべき第一なり。すべく物好にいやしきとおほらしきとハ氣象乃なすまさなれバ始は氣象乃野を離れ自然乃山水地の思ひとめぐ



らして假初にも浮華乃態となすべからず。なも庭にめぐらさき表事を巧るといへども。元来山水を寫しとる物なれバ村里偏地乃ありさまをあらはすべし。田舎めきたる景ハいやしきなく捨るしてよハあらバ。氣象み物くいやしきとハ天理につくろひかざりを表とおもふとうあるべし。氣象正しくれバ體志乃乱るる事なし。次乃卷乃圖を考へて體格を辨知べし

遠岡の景を借庭せへうらる待

自然の地景を用ひて。庭を作るに樹石作者乃働きあるべき事なり。書院座敷等乃椽より見渡し。

境内の山をひくめ。又ハ樹木等をきりてをき眺望の景を庭前へうつしうくる事あるべし

茶人の庭作りやう志事

茶人乃庭ハ作りると見へざる様に。或ハ在家市中なりとも山林深谷へ入るやうに作りなすべし

ちおき庭志事

ちおき庭ハ山嶋をてかきところを。白沙をしいて水志かわりに白沙用ひ。瀧もちおき瀧なり。作りやうかわる事なし

石燈籠置様乃事

石燈籠乃置所ハ作意によろくあり。次乃巻にある図と考へて置所をきめるべし。高さ志事さはくの儀あれども強くすて人に拘べうら次。先燈籠乃大小。庭の廣狭に應じて恰好見合せ肝要なり。火影泉水のうつりを計ふべし。燈籠乃石柱四角なるハ直に方面を見せては風情すくなし。角をすこし背て建れバ幽遠によろしく面白しけやう乃事。都て庭の模やうによるべき事なり

大なる主石を立しやうの事

守護石瀧副等の大石ハ月を経て地中へ流埋あるもの

なれバ遊庭を時々見あらため若石志川まバ絲かどに直を
すべし。是をなさずに大石なれバ其側の草木を除き
大勢の力をもつて引上直すこと甚労煩なるものなり。
是を容易直すに手段あり。其直すべき石を薦にて包
夜前よりも丸太を括りつけ。梃木を數くちら丸太の端
にかけても土俵にても重石とすれバ主石抜出ると。一人
して石のゆるミを自由に直し石の根に土を入て絲かど
に改め直すべし。此法人数を用ひず石の側の樹木等
を除き損する費なくしてむ良計なり
古之俗家、此道達人乃記し置所ハ秘書乃中より
抜萃して。粗文句乃暁しかたきをと。俗語に解して同
志乃人にふ示す。敢て愚意を差管測にあらず次視人
苟且に考ることなかれ

たてき土の泉水に奥を育はる事

たてき土の泉水ハはじめより。奥を入置べし。次ニ石灰
乃氣ある也へ奥をつぐざるなり。二三十月も経て後によく
く水をかへて後。奥ぢ入置べし。たてき土をうつく時に
あとえ乃平らあるぢとてき入れバ奥よく保ツなり。都
壺と横に埋こそべし。奥隠れなり。難しといふ奥ハ盲
ちロぬるとされなきでも。大きなる跡えぢ泉水の中へ入ち

ときハよく育ものなり。浅き泉水ハ寒暑ともに魚を
ころす。魚とかめにハまた種々かめと遊しかへし。皆かへ
れバ魚死するなり。故に寒中などにハ小さき泉水にハ
おほひをすべし

金魚を養ふ法

金魚を養ふ法ハむつかしからず。ぼうふりと云虫を喰すべし。
こゝにぼうふりの見やうハ。其形多くある所を泥をすくふて。
池の中へ入。半日かし日にかし。此泥と共あげて見れバ。
虫一処へあつまり居るなり。是をとりて金魚を養
ふべし。蜆の肉をとりて細く養ふべし

溜りある泉水の事

溜池のごとき泉水にても瀧を落し吐し是からくら
を作るなり

杉苔植やうの事

杉苔を植るにハ下地の土をかきならし。前げとき。其
上へ杉苔をふせべし。よく〳〵踏付其上へ土をふりかけ
目かけの時分にかくそゝけハよくつくなり

松の植やう秘伝

松ハ二月に植てよし。湿気を嫌ふ故に下へ炭の粉。木
の葉を入根へ蒟蒻を入植べし。細ゝ川芎を煎じ冷

かけくよし

松既に枯んと欲する時生す法

松すぐに色変じ枯んと欲せば。其鉢を堀出し。小根

の分を鋸にておとして抜かけ。其ひきめくちを鑞にて

巻。青にてくゝりて元のごとく植べし。伐かられる根

まさかるべし。然。かくのごとくすれば能く生かへり若く勢

よくなる。是奇妙秘伝なり

石燈籠并ニ手洗鉢を能く古びやうる伝

新敷石燈籠に手洗鉢をよく古べやうハ。石に糊をぬり。

其上へ落葉を多くふりかけて捨おくべし。露霜と共に

落葉朽く後白苔つきて古くなる事妙なり。青苔を

つくるにハ米泔の滓をさいくゝくれハよく苔蒸。又

蝸牛を砕き其汁を石にすりつけ木陰におきて水

を洒ぐべし。白苔の事に生古くなるなり

泉水の魚を獺に取されざる法

胡椒を紙に包こ池の四方に立おくべし。又蝸皮を以

さみを硝子の徳利のうちに入。泉水の上につり置べ

し。獺来ることなし

竹を斑にする法

硇砂 五十匁 細にす　緑礬 二十匁 細にす　胆礬 二十匁　石灰 大匁

右調合して和し。竹ハ何ハても紋を與ふべし。荒き
る時あるべし。其斑紋自然と出るがごとし

竹を植るによき月日の事

竹を植るにハ六月なる日に植べし。つゞかずと云事なし

接木さし芽乃薬

莪蒁乃霍香　壱匁　蓮肉　壱匁　人参　五分

右三味粉にしくみてとき。接穂乃そきめにぬれ
バよく接合なり。又さし芽の切口にぬりてよく根を
おろし候なり

催花法

る乃糞汁にて浸し洗げハ三四日よして開くべき
花も其翌日にひらくなり

菓乃実落ざる法

社日に菓のなる樹の下を春ハ実を結ぶて牢し
て落る事なし。又實を結ハざるにも右乃ごとく
して結なるものなり

松の植やうの事

松を移し植るに春乃社日にあるに土と根につけて栽
れバ百本移して百本ながらよくそだつなり

諸木を茂くする法

諸木をふとくするにハ堅にいくつも切目をつけおくべしふとくなるなり

## 諸木に毛虫つかざる法

諸木に毛虫つかざる法ハ。鯣のかしらにあつびらくと草乃鞘に入て。其木にいくつもつりさげおくべし。毛虫つかず

## 池に蛙を放つ事

山城井手の蛙ハ鳴声めづらしくおもしろくやさし。ら殊。多く蛙乃鳴くやうぬしきにハ。井手乃蛙を一疋捕へ来り放せバ余ほん蛙鳴やむ事なく

## 庭坪地形之部

坪の廣さ狭さ長あまり其場乃地形を以て山なとを作るべし。又築山あつて。山も嶋もおき来ある石はり立るときも。其場をよく石を立べし。又大きないかほどおほく。おくえいかほどふくくとも。其坪と見くらべはかりへべきものなり

南都般若寺石燈籠
惣高サ九尺 かニ石壇三つ
まて高サ二尺
火袋左二同ニハ鳳凰つひ
右二同ニハ獅子牡丹
大口西後ずぬき

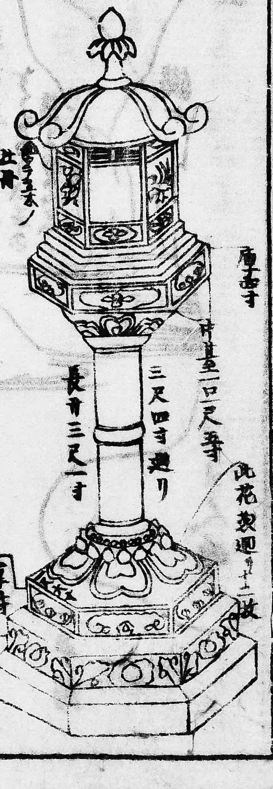
南都東大寺三月堂石燈籠
惣高サ九尺
火袋六角 長一尺六寸
地輪ハ自然石よ蓮花切付

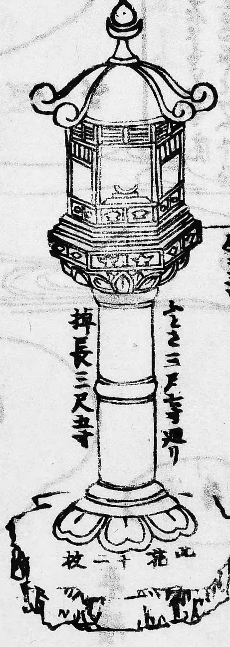
南都はうひ堂石燈籠
惣高サ六尺一寸五分
火袋六角

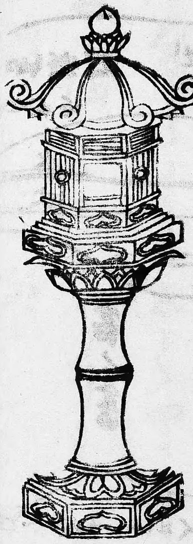
嵯峨太秦廣隆寺
石燈籠
惣高サ六尺五寸
正面浪がりかけくり
火袋六角

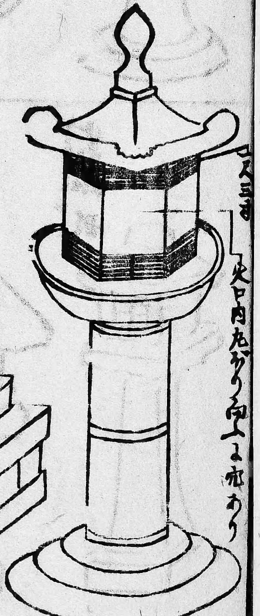
京都妙顕寺石燈籠
惣高サ八尺
やねのまハり三尺二寸
火袋高サ一尺三寸
臺高サ四尺
臺まをて五尺

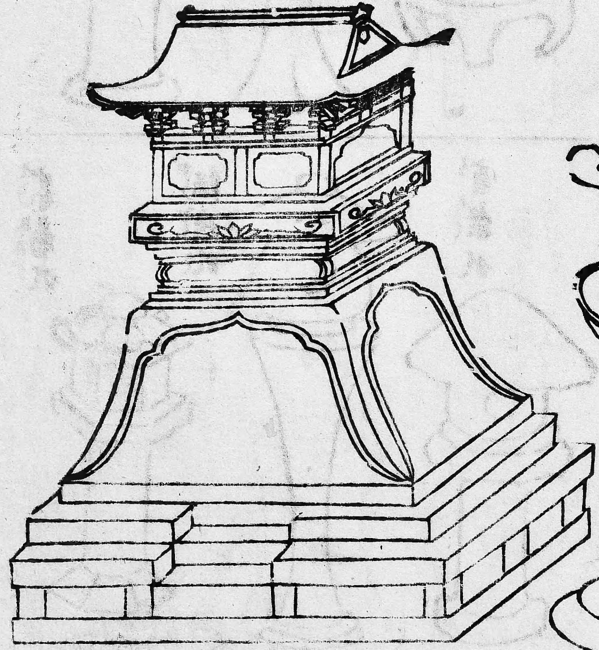
右五川を以く凡石燈籠の
ずすと次





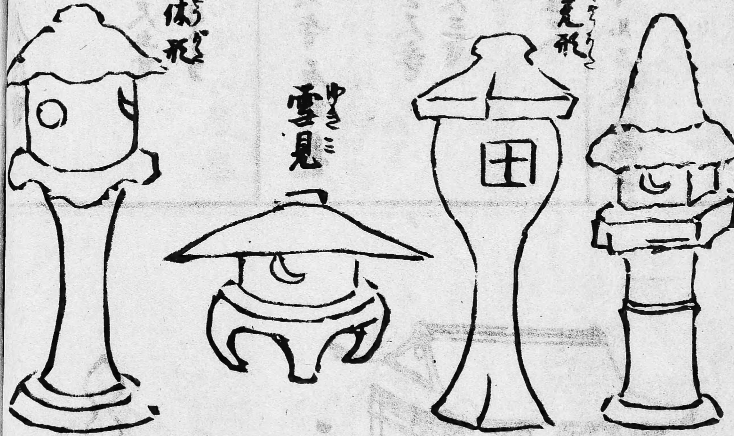




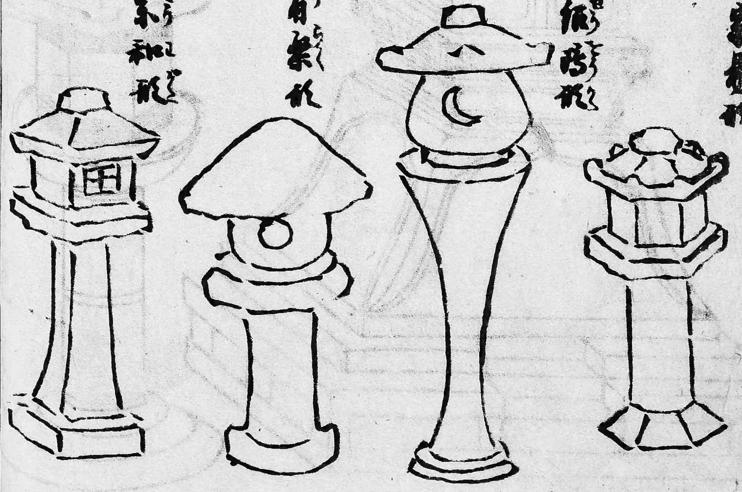


## 中興石燈籠之圖

遠州形（えんしうがた）　珠光形（しゆくわうがた）　雪見（ゆきみ）　利休形（りきうがた）



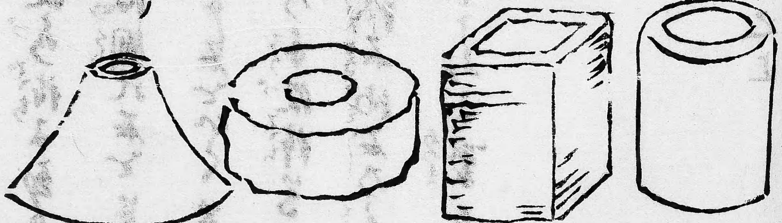
宗易形（そうえきがた）　織部形（おりべがた）　有楽形（うらくがた）　宗和形（そうわがた）



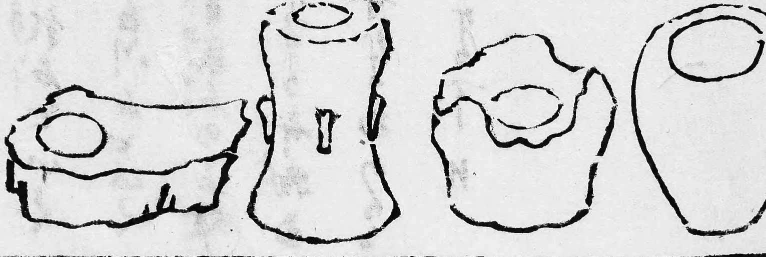


## 手洗水鉢之圖

圓星宿（えんせいしゆく）　方星宿（はうせいしゆく）　伽藍（がらん）　富士形（ふじがた）



石水壺（せきすいこ）　司馬温公われまつが（しばおんこう）　石水瓶（せきすいびん）　唐船（たうせん）



又石燈籠よりハ手洗鉢にあり。石ハ大和國御影石をもつて第一の上品とし。丹波國の石を第二とし。山城國白川石をもつて第三とし。近江國木戸石をもつて第四とす。其外自然石の石燈籠幷に箕ハ自然石の手洗鉢等にありてハ。天然のなりの奇物あるべし。其外庭中の飛石沓脱石の手洗鉢など尤奇なる物あり。奇物ハ數寄者の好むところに聚るなれバ縁一やうならずだ

築山庭造傳 巻之上